

神奈川支部情報 9条フェスタ 2009 報告<特集号>

発行者 撫順の奇蹟を受け継ぐ会神奈川支部 松山英司 発行日 2010.2.1

9条フェスタ 2009 参加企画

<主催> 撫順の奇蹟を受け継ぐ会

侵略の歴史を忘れないために ～元兵士のか証言ら学ぶ～

2009年 11月15日会場：太田区産業プラザ PiO 6F D 会議室

第一部 <元兵士の証言> 絵鳩毅さん

第二部 <対談と映像> 絵鳩毅さん、姫田光義さん、若者代表

9条フェスタで絵鳩さん証言

昨年11月15日に開催された「9条フェスタ 2009」は年々盛大となって今回は主催者発表で、100団体、3000人が参加しました。

撫順の奇蹟を受け継ぐ会ブースは午前、午後合わせて、延べ150人が参加して絵鳩さんのお証言に耳を傾けていました。

中帰連の方たちは高齢化のために、公共交通機関などで出かけていただくことがいよいよ困難な状況になってきました。それでも96才になられた絵鳩さんはたいへんお元気に証言集会に来ていただきました。第1部（午前中）で証言していただき、第2部（午後）は、岩手支部が計画して実現した撫順戦犯管理所訪問した中学生の報告と「泥にまみれた靴で」（DVD）の上映を挟んで、再び絵鳩さんに対談に出席いただきました。

丸一日たっぷりとお話しされた絵鳩さんの証言も、対談をコーディネートしていただいた、顧問の姫田先生のお話もたいへん貴重なお話しでした。あらためて以下のように記録しました。

第1部 <証言>

物心つく頃から戦争体験まで

幼い頃からの教育により自然に天皇に畏敬の念を持ち、当時は外国人をチャ

ンコロ、ロスケ、ケトウなどの言葉に何の疑問も持たず平気で使っていた。

絵鳩さんは旧制水戸高校時代の左翼運動にも参加せず、東京帝国大学（東大）の文学部倫理学科を卒業し文部省に入省した。教学局思想課に配属され図書検閲を命じられたが、「尊敬する先生を売ることはできない！」と退官、地方の女学校の教師となる。41年7月に臨時招集され、翌年4月に北支那派遣軍第12軍第59師団第54旅団第111大隊機関銃中隊に配属された。

初年兵教育時代は鉄拳制裁が日常茶飯事で、絵鳩さんは高学歴故に余計制裁に遭った。軍では大隊長命令で中国人を木に縛り付け部下に訓練のため銃剣で突き刺せ（実的刺突）、また、「人間地雷探知機」として中国人を行軍の先頭に歩かせ犠牲を強いたことなどを証言した。

会場からの「リベラルだった絵鳩さんが何故？」の質問に、「当時、上官の命令は朕（天皇）の命令であり、上官の命令に背くことは、自らの命と引換にしか出来なかったことをご理解して戴きたい」と答えた。

（第1部の報告は芹沢さんのJANJANへの投稿記事から転用させていただきました。記事全文は下記）<http://www.news.janjan.jp/living/0911/0911183340/1.php>

第2部 <対談>

シベリア抑留と戦犯管理所体験

奇蹟とは何か

姫田さん：

本日は午前中から本当にすばらしい会にできたと思います。ありがとうございます。私の教え子ですが、若者にも参加してもらっています。私が少しお話しした後に、午前中からの感想を話していただいて絵鳩さんへの若者からの質問をしていただこうかと考えています。

私は今年の9月に重慶に行きました。日中戦争史の国際シンポジウム

に参加してきました。重慶というところはご存じのとおり、日本軍による重慶爆撃によって数万人の犠牲者を出した大都会です。

一昨年でしたか。重慶でサッカーの試合があったときに市民からブーイングがあったことが報道されて、国際的にも問題になったことがありましたね。あれは、私が見ていても行きすぎたブーイングだったと思います。日本に対する反感が直接表れてあのような「ブーイング事件」になったのだらうと思いますが、学生さんたちとも話しましたが意外に冷静でした。

日本では、「中国では愛国教育が盛んに行われている」と言われていますが、それは教科書の中に正確に当時の日本軍がやったことを書けば、日本人から見れば「反日教育」と見られるかもしれませんが、それは歴史事実を書いているということでもあります。私は地方各地を歩いてびっくりしたのですが、中国に2千数百から3千近くある各県のどこの県にも地方史研究会のようなものがあります。またそのどこの研究会にも中国共産党の指導のもとついで、党史研究の部門があります。どこでも必ずそこで過去の歴史について資料を集めて研究しているのです。そういうことを見て「反日教育」と言えるかどうかです。私たち日本人から見た場合そう見えたとしても、中国人の側から見た場合はあたりまえのことをやっているに過ぎません。

私が重慶会議に参加して少し安心したのは、日本で言われているほど激しい反日教育が行われているわけではないということでした。だから安心していいのかというと、そうはならないのです。日本人自身の問題としてどうなのかとなると、先ほどからの絵鳩さんのお話やビデオでの映像などにもありましたように、歴史事実としてはきちっと押さえておく必要があると思います。これが一番大事なことです。

またこれが私たちの国際シンポジュームの趣旨でもありました。歴史的事実はきちっと明らかにしていく、その事実の上で各国、各民族がそれぞれの立場から議論することはいいと思います。

私の場合は、先ほどご紹介があったように、中帰連誌の44号で「私がなぜ撫順の奇蹟を受け継ぐ会の顧問を引き受けたか」、について書いておきました。字数が多いので私は B.K.U (撫順の奇蹟を受け継ぐ会) と言っています。なぜ B.K.U なのか。「奇蹟」とは何か。

広辞苑をひも解いてみてください。「奇蹟」とは有りえないこと、あるいは有りえないほどふしぎなこと、と書かれています。すなわちその滅多にありえない話を私たちジュニアが受け継いでいく、ということなのですね。

奇蹟とは何か。私は3つあると考えています。1つは人間が鬼に変わっていくというということは今日の絵鳩さんの話にもあるように、そのようなことはあります。しかし鬼から人間に代わることは難しいのです。

人間から鬼に変わっていくのは簡単とは言いませんが、暴力的に強制されたりしながら、意外に簡単に変わっていきます。しかし、1回鬼になってしまった人は人間に変わっていくためにはどれだけの苦悩が、つまり自分の犯した罪を口にすることか、どれだけ苦しいことかということが。

今日の絵鳩さんのお話を聞き、「泥にまみれた靴で」の DVD をご覧になった方はお分かりでしょう。どれだけの抵抗の中でのお話か、その話をされているということが、ご自分が変わっていったということを示しているのです。

この、鬼から人間に変わってきた奇蹟、これが一つです。もう一つは鬼か

ら人間に変えていった人たち、ということについて私はつくづく思うのです。私はじつは中国共産党史の研究者です。ですから、中国共産党の歴史については意外によく知っています。しかし今日その中国共産党がどれだけ悪口を言われているかということも承知しています。

しかし歴史の中で中国共産党は、少なくとも1949年までやってきたこと、これは人間的に見てとてもすごいことだと思います。「捕虜に対する優遇措置」なんて日本人には考えられませんね、本当に。

日本軍は南京大虐殺のときに、一挙に4万1千人の部隊を殺してしまったという事実があります。犠牲者の数が、合計30万人とか17万人とかの議論はあるようですが、とにかく少なくとも数万人単位の人を一挙に殺すということを日本人はやってきたのです。

しかし中国人は、共産党はそれをやらなかった。捕虜に対して優遇措置をとる。これには戦略的な意味もあったでしょう。当然にも。捕虜を自分の側の味方にして一緒に戦う、ということです。これを1949年までの内戦のときにそれを実際におこなったのです。これによって国民党蒋介石軍が次々と寝返って共産党と一緒に戦ったのです。

どうしてそんなことができたのでしょうか。それには捕虜を救済し、優遇するという伝統があったからです。その中国人同士で行ってきた伝統を日本人に対してもそれを適用したわ

けです。

また、私の研究の一つに「延安における日本人の反戦活動について」という本を出していますが、絵嶋さんたちが体験された時よりも以前に、捕虜になった日本人兵士たちが、中国人たちと一緒に日本軍国主義と闘ったという歴史があるのです。その人たちが最大限で8000人から1万人はいます。しかしその事実を意外に日本人は知らないのです。日本人の兵士たちが、自ら変わって日本軍国主義、天皇制軍国主義と戦ったという歴史があります。

なぜそうなったのか、というとそれはまず第一に命を大切にす、第二に食べ物をきちっと与える、第三に暴力を振るわない、たったこれだけのことです。「あなたの命は大切なのですよ」、「大切にしなさいよ」、いうことを徹底的に日本人捕虜に教えたのです。そしてそれが嘘ではないよ、とって絵嶋さんのお話にもありましたし、苦しい延安での山の中での生活の中で日本人に白い飯を食べさせているのです。うどんも食べさせているのです。

このようにしていながら日本人捕虜に、日本軍と戦え、などと強制的には一切言わないのです。ジュンジュンと諭すのです。じっさいに「反戦兵士」といわれるまでには一年から三年くらいはかかっているのです。これはなんと撫順の奇蹟のもう一つ前の奇蹟のことですが、意外に日本に知られていないのです。私は第二の奇蹟として中国人が日本人を変えていく、その奇蹟、日本人にも無い。ドイツ人にも無

かった。このような、第二次世界大戦中、あるいは大戦後における、人間が人間を変えていく努力、これがやはり私は素晴らしい奇蹟だと思います。これが第二の奇蹟です。

第三の奇蹟は何かというと、この二つの奇蹟を若い人たちが受け継ぐ奇蹟であります。撫順の奇蹟を受け継ぐ会は若い世代が引き継ぐということがスローガンですので、よろしく願いします。我こそは若いと思う人はすべてジュニアです。どんどん参加していただきたいところです。人間が人間を変えていく、人間が人間として変わっていく、この二つの奇蹟をきちっと受け継いで、後世に残していこうということがまた奇蹟だと、私は思います。

今日は会場の入り口で右翼の人たちの歓迎を受けましたが、あの右翼の人たちとはまったく違った意味でこの奇蹟を受け継いでいくだろう、と私はそう信じています。

中帰連の方々、絵鳩さんは96才になられて、最低の年齢の方でも86才です。それ以下の人たちになりますと、われわれがよくいう「老・中・青」と言いますが私は中年であります。老と青の間につなぎ役としてBKUの顧問を引き受けているわけです。

今日はその中の青の代表としてきてもらっている若者にバトンタッチします。どうもありがとうございます。(拍手)

若者代表：

私は戦争にかかわる問題について

は学校で勉強しただけの認識しかありませんが、いろんな残酷なことがあったことについても、それを聞いて耳を塞ぎたくなるし、目をそむけたくなります。でも今後の日中友好、世界平和のために何かをすればその歴史を忘れてはならないし、私たちがどのような決意で真剣に考えなければならぬのか、と思いました。

私もこの撫順の奇蹟を受け継ぐ会について私もその中心は奇蹟についてだと思っています。姫田先生がお話しされた鬼から人間に変わる事、変える事、これが撫順の戦犯管理所がきっかけでその奇蹟が生まれたのだと思いますが、その戦犯管理所でのお話をもう少し聞かせてください。よろしく願いします。

社会主義の優越性？！

—シベリア抑留を体験して—

絵鳩さん：

それでは午前中に引き続きまして、戦後の私の体験、一言で言うならば、どのようにして戦後、過去の戦争犯罪を反省していったか、というテーマになろうかと思っています。最初に、撫順戦犯管理所での人道的な待遇について語る前に、戦後初めて社会主義国家ソ同盟に捕虜として送られました。その時の体験の感想からお話します。

これが同じ社会主義国家でありながら、残念ながらそれは天と地の違いがあった。私自身の体験からそう申し上げます。ことさらソ同盟を非難しよ

うという意思是毛頭ありません。むしろ、ソ連に連れて行かれた時に、絶望のどん底にありながら考えたことは、過去学生時代に少々ではあったがかじっていた社会主義国家の優越性、ということは若干認識していました。それを実際にこの目で見られるという楽しみもありました。しかしこのことは徹底的に裏切られました。今思うと、まことに残念に思います。

昭和20年8月の終戦当時、私たちの部隊は北朝鮮に移動していました。ために、ソ連軍の武装解除を受けて、捕虜としてシベリアに連行されて5年間の強制労働に供せられました。この5年間のシベリアでの体験は私にとっては死の地獄、死の体験でありました。

シベリアに抑留された多くの捕虜が、民主運動という嵐の中に巻き込まれました。シベリアでは民主運動が極めてさかんでありましたが、私はこのシベリアでの民主運動には背を向け、600名収容者の中のたった一人の「反動分子」として摘発されて、密室に閉じ込められたという体験があります。

シベリアでの体験の中で、一番残念に思うことはソ連は日本人捕虜に対して絶対に真実を告げなかったということです。本当のことを告げなかったのです。ということは、我々は人間として扱われていないことだと、私は思います。終戦直後、私たちは北朝鮮の興上裡という小さな村落にいました。ひと月ほど、囲いの中に入れられた状態ではありましたが、比較的自由

に生活をしていました。

帰れるぞ！

1ヶ月後くらいのある日、100名くらいのソ連兵がやってきて、「ヤポンスキ・ダモイ！」＝「日本人・帰るぞ！」と連呼しました。兵隊たちはみんな狂喜した。軍隊には非常呼集ということがあります。夜中でも非常事態が発生した場合、非常呼集のラッパが鳴ります。5分以内に軍装を整え、すべての準備をして集合しなければなりません。そのような訓練を何回もさせられたのですが、ソ連兵の「ヤポンスキ・ダモイ！」の声を聞くや、軍隊当時の訓練よりも早く、おそらく半分程度の時間に5～600名の全員が一斉に集合しました。そしてソ連兵の指示通りに、両側に整列して警戒しているソ連兵の隊列の中を咸興の港へ連れて行かれました。

そのとき、残念ながらソ連の兵隊は日本人捕虜が持っていた腕時計をことごとく盗ってしまいました。そして、「日本へ帰る」と言って乗せられた船は南ではなく、北へ向かって進んでいきました。その日の真夜中のことでした。10数名のソ連兵が拳銃を片手にして、まだ残っている腕時計を略奪していきました。そのときにある兵隊が「隊長殿！！」と叫び、隊長の名前を呼びました。増田中尉が、「なんだ！」と立ち上がったとたん拳銃で腹を撃たれました。

翌日、将校団の参謀が相対して抗議

をしました。ソ連側の輸送隊の司令官、少佐の肩章をつけていた、その司令官は我々の前で全く謝罪の意思を表示しなかったのです。むしろ、嘘で傲慢な態度でした。まずそれが、私がソ連に対する反感の最初の一步でした。

一転！強制労働が待っていた

そのうちにシベリアに着いた。ところが同じ言葉で「ヤポンスキ・ダモイ！」と繰り返すのです。また指示通りトラックに乗ると、収容所を転々とたらいまわしにされました。シベリアでの食事といえば、聞くところによりますとソ連では日本人戦犯には1日に1800カロリーを保証するというようになっていたようですが、おそらく配布されたそれは1500カロリー内外ではなかったかと思います。日々の三度三度の食事は乾燥野菜と塩魚をいっしょくたに煮込んだ燕麦のお粥のみで、夕方にだけ350グラムの黒パンが付いただけです。ための大多数の人が慢性飢餓の状態、食べた後でもおなかが減っているという状態で、夜も寝られない空腹状態でした。

そのような給与の状態でありながら、日々強制重労働が課せられました。重い仕事では炭鉱の仕事、比較的軽い仕事では道路の清掃や側溝掘りなどでした。いずれにしても日々重労働に狩り出されました。

シベリアでの捕虜規定では「零下18度以下のときは屋外労働は禁止」、

となっていました。それなのに私は零下42度で除雪作業に狩り出されたこともありましたが、零下18度以下という捕虜規定も全く守れなかった。ざんねんながら・・・。

やがてシベリアで「民主運動」が始まりました。それは、民主運動に参加するということは、ほとんどの兵隊たちは帰国が早まるという条件になる、と理解するのです。したがって日本人捕虜の多くの方は早く帰りたいがために、同僚を密告する、ということが横行しました。隣の人間が信じられない、という人間苦にも陥りました。

四重苦と民主運動

私のシベリアでの体験は四重苦の体験だったと思います。昭和23年になって私はウォロシロフ収容所というところで、糧秣係、兼炊事班長をしていました。収容所の担当兵と色んな話をして、私は好感を持たれました。そのうち、兵隊が二人できて私に「民主クラブを創ろう」と持ちかけてきました。私は無碍に断ってしまいました。というのは、入所以来体験してきた、私としては許し難い、非人間的な扱いに対する強い反発心があったからです。

民主運動が始まりますと「日本新聞」の読書会、「ソ同盟、共産党史」の読書会などが毎晩開かれまして、重労働から疲れて帰ってきた兵隊たちが狂信的にそこに駆りだされました。

私は、比較的楽な仕事をしていたのでそれには参加していました。その過程で、私はソ連の政治部員によって二回、呼び出されました。

最初の時は、午前中に述べた、中国の索格荘での実的衝突のことを聞かれました。それを私はスラスラと認めました。というのは、あれは大隊長の命令だから俺には責任はない、と安易に考えていたからです。そして二度目に呼び出されたとき、シベリアで知り合った池田君の身上調査、つまり「密告の強要」でした。

池田君は、満州国の警察官でありました。その警察官であったことの素性がばれたら帰れないかも知れない、と私に漏らしていました。政治部員は、その池田の前歴を洗いざらい調べて報告せよ、と迫ってきました。そして最後に「これは命令だ！！」とおどされました。私は熟慮の末、答えました。たとえ命令であっても添えられません、と。

政治部員は激怒した。「もうよい、帰れ！」「だが、お前は帰さんぞ！」と怒鳴りつけました。ここで私は、そのために生き延びてきた「帰還の夢」は消え去ったことを悟りました。絶望のどん底に落とし入れられてしまいました。

部屋に帰って、悶々とした幾ときかが過ぎました。そのとき、天上の澄み渡る声を聞いたのです。

「それでよろしい！」「お前は正しいことをしたのだ！」

という声と同時に、カントの墓碑銘が蘇ってきたのです。

「それをしばしば、また常に、思えば思うほど、ますます新たに、また力強く、驚嘆と畏敬の念をもって心を満たすものが二つある。我が上なる星輝く空と、我が内なる道德律である」

この言葉は彼の「実践理性批判」の結語であり、また彼の墓碑銘でもある。この言葉を静かに反復して私は救われた。私は人間が人間と言われるにふさわしい「良心の声」に従った。そのために「帰国の夢」は失ったが、「密告者」とはならなかった。

昭和24年に入りますと、シベリアの民主運動は「反ファシズム委員会」と改名されました。またハバロフスク地区本部の指導者たちが頻繁に収容所に出入りし始めました。

彼等はいずれも立派な服装をしていた。真新しいソ連製のルパーシカ（綿入れの上衣）とピカピカの長靴を身につけていた。その姿は、「異邦人」のようであり、その態度は横柄であった。彼等だけには警戒兵もつかず管理所への出入りは全く自由だった。上等な食事をし、俸給も貰っていた。私はどうしても彼等が好きになれなかった。私の目には、彼等は「虎の威を仮る狐」にしか見えなかった。(小文字部分は絵嶋さんの手記より)

たった一人の反動分子

と同時に「反動分子」の摘発がはじまったのです。こうして昭和24年の夏のある日、ウォロシロウ収容所の反ファシスト委員会が大衆集会を開き

ました。そこへ彼らが「反動分子」とにらむ、私を含む3名が呼び出されました。大衆に、私たちの「反動的な言動」を摘発させるのです。そして最後に委員長から、前言の撤回と謝罪を求められました。

私に対しては、多くの大衆から「シベリアの民主運動はソ連によってそのかさされたものだ」と我々の民主運動を軽蔑し、ある者はまた、彼は「シベリアの民主運動は、早く帰りたいための運動にすぎない」「そんな運動には参加しない」と公言している、等々が挙げられました。

最後に委員長は言った。

「いま、何か言うことはないか！」と。

私は答えました。

「いま、諸君らから挙げられた言動は、すべて間違いなく私の言動である。」「同時に、私の人格的表現でもある。」「故に、この場で訂正する意図は全くない！」と。

大衆はしばらく、啞然として声をのみました。

やがて誰かが叫んだ。

「反動だ！」

「奴を隔離しろ！！」と。

こうして私は、600名の収容者の中のたった1名の「反動分子」として、病棟の外れの1室に隔離されてしまった。食事も別に部屋まで持ち込まれ、仲間との接触を一切絶たれた。しかし労働には駆り出された。

私が隔離されてほどない或る日、管理所長が自ら私を部屋に訪ねてきた。彼は、現在の私の境遇を、個人的に同情しているよ

うだった。所長は、山下、寺田のように自己批判して早くもとの状態に帰ることを勧めた。彼は静かに諭すようにこんなことも言われた。

「君は大学では哲学を専攻したそうだが、そんな君なら、当然、唯物弁証法が観念弁証法よりも正しいことぐらいは分かるだろう」

その時私は、言下にこう言い張った。

「いや、分かりません。分からないから民主運動も致しません」

「じゃあ、何時になったら分かるのかね？」

「それが分かるまでには、少なくとも10年はかかりましょう」

所長は、苦笑しながら呆れ顔で去っていった。以後、私には暗い孤独の日々が残されてしまった。(絵鳩さんの手記より)

そして、昭和24年9月、秋晴れのある日、私は独りトラックに乗せられた。辿り着いたところは、ウォロシロフから100キロも離れた、アルチョム収容所だった。たった一人でトラックに乗せられて送り込まれました。そこは「反動分子」だけが集められた「懲罰ラーゲル」であった。

しかし、その後そこからまたウラジオストク収容所、ハバロフスク収容所を転々として強制労働に服しました。

撫順戦犯管理所は

人間改造の学校であった

これからいよいよ撫順戦犯管理所時代に移ります。

これは一ことで言いますと、反省から謝罪への過程を経た6年間でした。**撫順戦犯管理所は人間改造の学校であった**、と言えらると思います。

1950年7月、私は969名の仲間とともに、またしても「ダモイ！」と言われてハバロフスクのある無人駅から貨物列車に乗せられました。これもまた帰国列車ではなかった。中華人民共和国への身柄の送還でした。その時から、撫順戦犯管理所で6年間の拘禁生活を送りました。

まず最初に、人道的な待遇について述べます。これが反省の糸口となります。撫順戦犯管理所で私たちは想像を絶する優遇を受けました。周恩来総理は「戦犯として人間である」「人間である以上、その人格を尊重せよ」と指示された、と後に聞きます。

撫順戦犯管理所では、強制労働がなかったばかりか、戦犯に対する殴打の音や罵声すら聞くことはなかった。そればかりか、戦犯収容所の職員たちは日に2回のコーリャン飯を食べながら、我々戦犯には3度3度米の飯を与えたばかりか、正月や記念日などにはお雑煮、お寿司、おはぎ等々の特別食までふるまってくれたのです。

日々の運動時間の確保は言うまでもなく、週に1度の入浴、月に1度の理髪、随時の身体検査、体育日の設定、数え切れないほどの映画上映会、中国映画も外国映画も見せてくれました。春と秋には体育祭と文化祭も開催されました。また病人は民間病院へ入院

させ、そして有り余る学習時間の保証、等々と至れり尽くせりの待遇でありました。

聞けば、当時の孫明齋管理所長は叔父を、また、常に笑顔をもって接してくれた呉浩然指導員は実の父親を、またある指導員は自己を除く全家族員が日本軍によって殺害されたと聞きました。このような人々にとって我々日本戦犯は、当然憎むべき敵であるはずです。にもかかわらず、以上述べたような優遇をしてくれるではありませんか。

私は過去、日本軍が中国人捕虜など人間と思わず、拷問したり、虐殺したりした事件を思い浮かべ、わが民族とその一員である自己とを深く恥ました。と同時に中国側の職員たちの偉大な人間指導に心から敬服しました。そのことが、私が初めて過去の戦争を反省する糸口ともなりました。

理論学習の成果

中国人民の立場に立つ

そこで私はこのような偉大な人間をつくり上げた中国共産党とはどのような党であろうか、と真剣に考えないわけにはいきませんでした。まず、毛沢東の論文「矛盾論」と「実践論」を共同学習し、私は強い衝撃を受けました。

この平明な哲学論文、それはあの偉大な中国革命の理論的指導者であったことを知り、過去私が自らのよりど

ころとしていたカント倫理学の探求も、理論の遊戯にすぎなかったことを深く反省させられました。

また毛沢東の論文「持久戦」については、日中戦争の勃発当初に書かれたものながら、戦争の推移が科学的に、的確的に捉えられていて全くその通りの展開と結末を見たことに、強い感動を受けました。

また、この論文の中には八路軍の守るべき「3つの民主主義」が書かれています。その第一が「上級と兵士との民主」、第二が「軍隊と民衆との民主」、第三に「捕虜との民主」という驚くべき表現に接しました。私たちが、常日頃受けているこの人道的な待遇が、実はここに深い根拠をもっていたことを知って、私の感動は止まりませんでした。

そして次第に私は中国共産党の、世界と人間を改造するというその遠大な理想と、恒久平和への願いを理解することができ、被害者である中国人民の立場に立って過去の戦争を反省することができるようになりました。

認罪運動の展開

先日、NHKのハイビジョン放送で「認罪：撫順戦犯管理所の6年」の放映がありました。そこの私も登場しましたが、プロデューサーとけんかしたために私の出番が最も少なくなりました。私の主張したことで重要なことは全部カットされました。あの番組の中で私が特に批判したいことは、あの

番組は、戦犯でもない人たちが中国へ戦犯となって送られて、しかも中国は彼らが犯した罪を告白することを強要した、というそのような面が非常に強いのです。

プロデューサーの言ったことは、彼は番組の目的は、「有りのままのことを表現することだ」というのです。撫順戦犯管理所は、日本人捕虜に対してとったその政策がどんなものであったか、ということを知るためには彼らが国へ帰って、その後何をしたかということに触れなければ全く意味はない、と私は強く言いました。しかしそのような私の主張は認められず、あのような番組となってしまいました。

中国に送られて5年目を迎えた春、私たち日本人戦犯は「認罪運動」を起こしました。「認罪運動」とは、過去侵略戦争の中で各自が犯した一切の罪を告白し、中国人民の前に深く謝罪するという、そのような運動でした。それは、一面では死を覚悟しての運動でもありました。当初私は大学教育を受けたために自分を進歩的だ、とうぬぼれていました。日本軍隊の野獣性には怒りさえ覚えたとして、自ら侵略戦争に参加しながら、自己をその埒外においていました。

だが、考えてみれば過去、天皇制ファシズムに抵抗しないで、現実に銃を携えた侵略軍隊の一員である以上、その中で思想、意識の相違などというものは被害者にすれば、これはとるに足らない矛盾でしかない。その上私は大隊長の残忍極まりない命令に屈伏して、初年兵に捕虜を虐殺させてしま

いました。私をこの罪に陥れた責任、これは決定的に重いし、またこの大隊長の命令は、「上官の命令は朕の命令と心得よ」と宣言して憚らなかった日本軍隊の総帥、天皇にまで及ぶことも、また確かでありましょう。

だが、上官の許し難い命令に屈伏して、実行したのはまさにこの私でありますから私の責任でもあります。日本軍隊の機構の中ではやむをえなかった、とした先ほどの自己弁解は、殺害された被害者にすればそれは許し難い弁解であった。私は、こう悟ることができました。

そして、侵略戦争中に犯した一切の罪を告白して、中国人民の前に深く謝罪しました。

寛大判決

中華人民共和国の日本人戦犯に対する、軍事裁判は極めて寛大でありました。1062名の日本人戦犯中わずか、45名が軍事裁判にかけられましたが、そこには死刑も終身刑もなく、最高刑が20年の禁固刑でした。しかもこの刑期の中には戦後経過していた11年が参入されていました。日本人戦犯全員は、起訴免除、即日釈放の寛大判決を受けて昭和31年夏、3班に分かれて帰国しました。

私も最終班の1名として、再び懐かしい祖国の土を踏むことができました。28才で軍隊にとられて私は、すでに43才になっていました。だが15年間にわたる、暗い戦争の中で、せ

めて最後の6年間に撫順戦犯管理所の中で過ごしたことは、じつに幸せなことだったと今でも思っています。

帰国後、我々戦犯体験者は「中国帰還者連絡会」をつくりました。そして、高齢のために会を解散するまで40数年間にわたって侵略戦争に反対し、平和と日中友好に貢献するための運動を、ささやかながら続けてまいりました。これはひとえに我々が戦争中に犯した罪の償いでありましたが、それは同時に、後に続く若い世代の人たちに我々の二の舞だけは踏んでもらいたくないから、と考えたからであります。

ひとまず終わりにします。

姫田さん：

ありがとうございます。絵鳩さんが、まるで原稿を読むように正確にお話ししていただきましたが、じつはご自分で書かれた膨大な手記の原稿がございまして、目次だけでも膨大で、その中には戦後の、今の最後にお話しされた中国帰還者連絡会の組織や活動のこと、そして照れくさくてお話しにならなかったのだと思いますが、帰国後すぐにご結婚されたのです。1956年に43才だったのですね。

僕はこの原稿を読ませていただいて、感動しました。奥様は38才で、15年間待ってくださっていたのですね。(絵鳩さんに向かって) どう思われましたか？

「洗脳」とは？

絵鳩さん：

私が舞鶴に上陸する際に、船は沖の停泊して小さな船で何回も往復して運んで上陸したのです。みんなわれ先にボートに乗り移ろうとするのです。私は最終のボートのしかも一番最後に上陸しました。中国帰還者連絡会のメンバーでは一番最後に上陸したことになります。

そこで、自分では落ち着いて上陸したと思ったのですが、私を迎えにきた許嫁がわからないのです。弟がいてその隣に女性がいたのですが、弟の嫁と思ったのです。そして東京から家へ帰りました。私の兄弟が迎えにきました。私の妹が馬鹿になれなれしくあいさつするのですが、妹がわからないのです。妹に「お兄さんは戦争で頭が変になった」と言われるほど、わかりませんでした。

ともかく、15年間は男性ならば待ちきれないだろう。私も待ちきれなかった。それを考えると今でも妻には感謝しています。(拍手)

姫田さん：

色々お書きになっていることで感動する場面が多くて、私も始めて聞いたのですが、人間が人間として扱われなかったゾビエト時代のラーゲリの体験から、そのことが基になって中国の戦犯管理所で人間として扱われたことの感動、感激がよりいっそう大き

くなったのだというように理解できました。

シベリア時代の悪口、苦勞話は多くの体験者が話してきましたが、その人たちが帰国してから人間的に変わったという話はあまり聞いていません。ですから「洗脳」という言葉が一時はやりまして、私が論文で「洗脳」なのか「翻身」なのかという論文を書いたことがあります。

「洗脳」というのは、ラーゲリでのお話しにあったように強制的に、民主化とか、告白とかをさせるという、そうして人間の頭を無理矢理変えていこうとすることが「洗脳」ですね。「翻身」というのは今日の絵鳩さんのお話のように、自分で反省し、自分で変わっていこう、という努力をすることが「翻身」です。中帰連の方々が、決して洗脳ではなくて翻身だったのだ、ということを書いたことがあります。今日のお話を聞いて、私の書いたことが間違っていないことを確信しました。

もう少し絵鳩さんにお話しいただきます。「洗脳」についてお話しください。

絵鳩さん：

私たちが舞鶴に上陸した日の朝日新聞の社説で、「今度、『中国で洗脳を受けた最強組』が上陸した」、と報じました。仲間からそのことを聞いて、そのとき私は始めて「洗脳」という言葉を知りました。「洗脳」ということは姫田先生が言われたように、物理的な強制のもとに絶えず同じ思想を注

入する、というようなことになろうかと思えます。中国で、我々戦犯が最初どのような扱いを受けたかと言いますと、どうしてもシベリアでの体験との比較になりますが、我々がハバロフスクの無人駅から貨物列車に載せられて、鍵を掛けられて、すし詰め押し込められたその貨車の中は7月のことですから、じっさいに40度は越えていたと思えます。

ところが国境の駅、中国の「綏芬河」で身柄を中国に引き渡されたときは、満鉄の4人掛の客車に乗せられました。そして看護婦さんが車内を「病人はいませんか」と回ってきたのです。貨車から客車に移されただけでも涙がこぼれました。その上、どうにもならないほど空腹だった私たちに腹いっぱい食べさせてくれました。「満腹」ということがどんなに幸福なことか、と感じました。

戦犯管理所に着いて、私たちは丸1年間放っておかれました。中国側からは何も要求しない。ただ壁には「大声を上げてはいけない」などと書いた「戦犯の心得」が貼ってあるだけでした。監房規則ですね。あとは自由にさせていたのです。

退屈した我々は何をしたかというところ、ご飯を残しておいて、それを固めたり紙を貼ったりして将棋の駒をつくり、或いは麻雀パイもつくりました。それで、四六時中遊んでいたのです。それを見ても、中国の看守たちは一言も言わないのです。

「北風と太陽」

1年間遊びほうけたときに我々はやがて遊びにも飽きて、何か本が読みたくなった。そこで中国側に申し入れて与えてくれたのが、中国の「人民日報」、中国共産党の機関紙などや、満鉄にはたくさん蔵書があって、それも入れてくれました。中国語のできる仲間が「人民日報」を読んで、聞かせてくれました。

要するに「洗脳」というのは、インソップ物語の「北風と太陽」の通りでした。寒風が旅人に吹きつければ、旅人はますますマントをきつく巻きつけます。要するに私たちは「帝国主義のマント」を纏っていたのです。中国は太陽だったのです。太陽が出てくれば旅人はマントを自分で脱ぎます。この「北風と太陽」の話が、そのまま撫順戦犯管理所で体験したことに当てはまるのだと私は思います。

だからけっして我々はNHKが放送したような、あの通りではなかったのです。(2008年11月30日NHK衛星放送放映：<認罪>中国撫順戦犯管理所の六年) 一部には真実もありますが、どのように我々が変わったかということは描かれていません。バイブルの中に「汝の敵を愛せよ」という言葉がありましたが、私は人間にはそれはでき得ないことだと思っていました。その人間ができないはずのことをしたことが、私は「奇蹟」だと思うのです。

そのことを中国共産党がじっさい

に行った。憎むべき戦犯を「罪人」としてではなく、人間として待遇した。憎むべき敵を愛するということは人間にはできない。つまり、それは奇跡的な行為だったのですね。それがあったからこそ、過去数多くの戦争犯罪を起こした戦犯が、その悪を認め、過去に終止符を打って、新たな人間に、平和を愛する人間に転変していったのです。

撫順の奇蹟とは、撫順戦犯管理所で日本戦犯に対して行われた一つの奇蹟、その奇蹟があったからこそ日本人戦犯が日本軍隊の先兵から、大きな意味で言えば平和のためのたたかひの戦士になり得たのだ、と思います。

第4の奇蹟

姫田さん：

その通りだと思います。戦後の969人、そのうちにも病気で亡くなられた方もおられました。帰国された中でたった一人だけ、平和と民主主義に反する裁判官になった人がいますよね。これもある意味、「奇蹟」なのです。あの方々は帰国後、職業の危機にも晒されながらみんな地道に、黙々と平和のためにたたかってこられたのですよね。

絵鳩さんの場合は、先生に復帰されて、郵便局長をも勤められてキチッと職業につかれておりましたが、本当にまじめに日中友好に尽くされたと思います。

そこで私が先ほど言い忘れたので

すが、第4の奇蹟ということがあると思います。それは私が大学院の時に中国で起こった「文化大革命」の時、日本の民主運動、平和運動はそのほとんどが分裂しました。中帰連もやはり分裂しましたね。ですが、それがなんとそれを克服して再統一されています。

これは戦後平和運動の中でも珍しいケースです。これが私は第4の奇蹟だと思います。そしてこの第4の奇蹟を呼び起こしたのも、絵鳩さんをはじめ皆さんの、たいへんな決意とご苦勞があったと思います。その点で私はたいへん尊敬の念を覚えているところです。

若者に司会をバトンタッチします。

若者代表：

管理所で映画上映された、と聞きましたがどんな映画でしたか。

絵鳩さん：

忘れた部分もありますが、今思い出すのは「箱根用水」・・・なかなか思い出せないなあ・・・イタリア映画の「自転車泥棒」、中国映画では「白毛女」、なかなか思い出せない。だが1週間に1回くらいは見ていたと思う。日本映画、中国映画、だけでなくロシア映画の「石の花」もあったように思うし、世界各地の映画を見せてくれました。

姫田さん：

「石の花」ではありませんか。ソ連で最初のカラー映画で、私も見ました。

絵鳩さん：

とにかく各地の色々な映画を見せてくれましたね。ドイツ映画は少なかったようだね。映画を見る機会については、一般の中国人たちよりも優遇されていたことは事実だと思います。

当時のわれわれの食事は<上>将官、<中>佐官、<下>一般兵と分けられていました。その一番下のわれわれ一般兵の食事でも当時の中国の人たちの3日分の食事をわれわれに与えてくれました。

若者代表：

今まで絵鳩さんの体験されてきたことで、今の若い人たちに一番伝えたいことはなんでしょうか。

<若者たちへ>

自分の力を信じなさい

(しばらく考えたあと・・・)

絵鳩さん：

一番昔にさかのぼって言いますと、私が中学校に入学したとき、学校というものが何のためのものかわかりませんでした。学校に入るまでは、近所の「高木の正公(シウコウ)」と一緒に海岸の松林で松ぼっくりを拾ったり、蟻を追っかけたり、たまには川魚をとったりして遊んでいました。小学校は遊ぶところと思っていました。毎日毎日、「正公」と一緒に「へへ、のの、へのもへじ」の字を書いてばかりいました。そしたら最初のテストで10点満点の4点だったのです。

その点数が何を意味するかわからないのでその日もまた鞆を置いてまた遊びに行きました。それをを父親に見つけられてものすごくしかられました。「このテイノージ(低能児)め！お前はうちの子供ではない、出で行け！」と家を追い出されました。父がお寺を借りていましたので、その墓地へ行っていました。父は昔、鳥取県の小学校の教師をやっていました。その当時、教頭会議で教頭たちに嫌われていた県知事と正面衝突をして首になって、その当時は高等小学校を卒業した生徒に3年間の教育をする塾をやっていました。

その父親にしかられて、その時私が最初に経験したのは、よちよち歩きの弟たちに「やーい、シテンヤ(4点)！」と言われたのです。そのことが、初めて悔しく思ったことでした。世の中で最初に悔しく思ったことは弟たちに馬鹿にされたことでした。その時私は決心しました。決して将来、私は人にバカにされるような人間にはならないぞ、と。これが私の最初の決意です。

2番目に言いたいことは、田舎の小学校でしたから上への進学率が非常に悪い学校だったのです。私も1年浪人して入ったのですが、1年浪人した時に私の考えたことは、人にできることで自分にできないことがあるはずはない、ということでした。ナポレオンの「私の辞書に不可能の文字は無い」が私の格言になりました。そして1日に12時間勉強しました。

兄貴は東京の予備校へ行って失敗して遊びを覚えて、学校を2回も失敗

しました。そこで僕は絶対に予備校には行かないと決心しました。自分の力を信じて12時間の勉強をしてしかもその間に必ず1時間の運動時間を設けました。裏の畑でハイジャンプをやったり幅跳びをやったりしました。そのことがいまでも本当に生きているのだと思います。

今、便利な世の中になっても上級学校への入学試験も大変厳しい社会だと思いますが、皆さんもどうか他人に頼らずに自分の力を信じて精一杯の努力をしてください。

<若者たちへ>

不動の信念を持ってください

もう一つは、社会を生き抜くために何か**不動の信念**を持ってください。その信念をしっかりと持っていればどんな逆境にも耐えられると思います。我々はソ連で5年間、抑留生活を送りました。その時、強い信念を持たない人は将来を案じて、どうなったでしょうか。脱走して銃殺された人も大勢います。

この「信念を持つ」ことの裏返し、僕がシベリア時代を生き抜いてきた力の中のひとつは、「明日のことはわからない」です。だから明日のことを思い患うことをするな、ということでした。「明日は野となれ、山となれ」と、棄てばちかもしれませんが、とにかく将来のことはわからないのです。明日のことはわからないのだから、わ

からないことをあれこれ考えていることは愚の骨頂です。わからないことを考えるからストレスに陥ってしまうのです。

私がシベリアの抑留生活の中で学んだことは明日のことはわからない、です。明日のことは神に任せることです。人間は今のことを精一杯やる、そのことは生き抜くことです。将来のことは神のみが知るのであって、あまり将来のことをあれこれ悩まないで、その日を生き抜く、充実させるということに力を注ぐべきだと、私は思います。

若者代表：

力強いお言葉をどうもありがとうございます。心に滲みます。

「漫談教師」＝絵鳩毅

姫田さん：

絵鳩さんの場合はもう一つあります。絵鳩さんが「漫談教師」と言われていましたね。今日本当によくわかったのですが、絵鳩さんは本当によく話されますよね。それも力強くはっきりと仰る。これは健康の秘訣ですよ。お話の内容は大変な深刻で、真面目な話を、大きな声ではっきりとお話される。

絵鳩さん：

「漫談」について話しましょうか。私が文部省をやめて最初は山梨県の女子師範学校に勤めました。女子師範学校と山梨女学校が併設になってい

ました。師範学校は小学校の教員になる人ばかりでした。その当時は「社会」のことを「修身」といいました。私はその「修身」を女学生に教えました。師範学校では、論理学、心理学、それから教育学を教えました。始めて教師になって高等師範学校を出た先生方は、その日に教えることをキチッと計画を立てて、黒板にきれいに整理して教えるのです。

私はそんなことを知りませんので、話すことがないのです。教科書はそれなりにやったのですが、主に力を注いだのは今あなた方が読んでおいたら将来プラスになる本を自分でピックアップして、読書の紹介をしました。もう一つは旧制水戸高等学校のときの話をしました。私の初恋の話をしましたけれども・・・。

私の考えの中には修身などというものは、道徳教育の羅列なのですね。とてもまじめになって話す気にならないことが書いてあるのですね。だからあけてもくれても本の紹介と、高等学校の自由の生活について話しました。水戸高等学校には舎監がいないのです。7つの寮に別れていて、それぞれの寮の親玉はみんな学生で、要するに「自治寮」だったのです。門限もなければ何らの制約もない、今の社会にあのような学校があった方がいいなあと私は思うのです。今では考えられないような自由な生活であった。

その中で私たちが一番身に付いたのは毎晩、コンパといって各部屋に仲間たちが集まって、ホール（食堂）からコーヒーやうどんをとって、時には

徹夜で「人生いかに生きべきか」を論じたり恋愛論をたたかわせたりしました。そのことがものすごく刺激になって、いい勉強になりました。

その影響を受けたので私は漫談ということが、人から人に与える影響について、自分が経験した本当のことを伝えるということが、相手の人にとってどれだけプラスになるか、力を与えるかということ、高等学校時代の体験にもとづいて話をしました。だから生徒からは「漫談教師」と言われました。

そして結局、1年くらい経ったとき校長から呼び出されて、校長と正面衝突しました。校長が私の教室での「漫談」のことを指摘したのです。毎朝の体操を校長だけがやっていたのです。そこで私は、なぜ校長だけが朝の体操をやらないのか、あなたが体操をやったら（漫談を）やめましょう、と答えたのです。

校長は身体が不自由なので体操は行わない、と言いました。とまれ、結局私は首を切られてその学校を辞めました。自慢になるかも知れませんが、その漫談のおかげだと思います。過去、私が教えた最初の生徒たちはもう85、6才になりますが、未だにその内の30名くらいが今でも年賀状をくれます。

先日東京で「平和のための戦争展」に出席して話したとき、50年前上田高校で教えた生徒が私の名前を聞いて、わざわざ軽井沢から出てきて会うことができました。本当にうれしかったですね。あのとき、皆さん本当に真

剣に聞いてくれてうれしかったなあと思いますが、それにプラスアルファがあったのです。たいへん感謝しています。

楽観主義者＝絵鳩毅

姫田さん：

私が言いたかったことですが、絵鳩さんの経歴を聞いても楽観主義者ですよ。信念の強さ、必ず明日も生きていくという、これがまたものすごい楽観主義ですよ。この楽観主義が長生きの秘訣でもあるのです。

もう一つ私が感動したのは、絵鳩さんの教え子たちが、戦場に行くときにみんなが駅まで来て泣いてくれた、と手記に書いてありました。それもみんな女の子なのですね。そのような記録を書かれたのも楽観主義ですね。それだけではなく、これも絵鳩さんの手記を読んで感動したのですが、戦争からシベリア、戦犯管理所までの15年間をずーっと待っておられた奥様と、ついに結ばれたのです。たいへんドラマチックですね。その楽天主義、将来の日中友好と平和を信じきっておられますよね。

そこで日中友好と平和に関して若い人たちにどのようなことを期待しますか。

一人の人間が

一人の人間に及ぼす影響

絵鳩さん：

話は少し変わりますが、私は、一人の人間が外国人と接するとき、その接することがその人の想像を超える効果を生むことがあります。私は一人の外国人と接するときには誠意を持って接すること、そのことが自分の思いがけないような大きな成果を日中友好に及ぼすのだと思います。

周恩来総理は、「戦犯とても人間である」と指導し、我々戦犯の好待遇の元締めだったのが周恩来総理だった。この周総理が日本人戦犯に対してとてつもない優遇をしたのかという、それを考える一つの鍵ですが、これはもし間違っていたら許していただきたいが、私が聞いたところによると周恩来総理は過去の一時期、日本に留学されていました。そのとき下宿先の女将さんからじつに親切なもてなしを受けたと聞いています。その優遇されたことが、もちろんそれだけではありませんが、後の日本人戦犯に対して想像を絶するような優遇をした一つの根拠にそれがあると私は思います。ですから、一人の人間が一人の人間に及ぼす、その影響が国際友好の上においては極めて有効なことだと、私は考えます。

我々が、中国帰還者連絡会をつくりまして、毎年のように戦犯管理所の先生方をお呼びしました。私たちはもちろん誠意を持ってもてなしました。そのことが先生方がお帰りになって、じっさいに日中友好に大きな影響を及ぼしておられます。そのことの根拠に

ついて話します。私たちは20年間の分裂がありましたが、そろそろ再統一しようという運動が起こったとき分裂した双方（社会党系と日本共産党系の）の中心メンバーが集まって、先生方を一緒にお呼びしようではないかという話になりました。そのことを我々の再統一の前提にしようではないか、ということになりました。そして先生方をお呼びして一緒に先生方をもてなしました。

その訪日団がお帰りになって、中国の関係者にそのことが報告されたことによって、それでは撫順戦犯管理所を元通りに改造して記念館にしよう、という方針になったと私は聞いています。

いま話したように、一人の力を侮ってはいけません。大切にしなければならぬ。特に外国人と接する我々は、親切で至れりつくせりの態度で接して欲しいと思います。そのことが我々が気づかないところで大きな成果を生むことになると思います。

「中国帰還者連絡会」から「撫順の奇蹟を受け継ぐ会」へ

姫田さん：

ひとり一人の力を大切にしようという絵鳩さんのお話はとても大事なお話です。中帰連にしても受け継ぐ会にしても、我が国においては極めて少数派です。

私は中国へ行くと「良心派」といわれるのです。自分で言うのは恥ずかしいのですが、なぜ「日本の良心派の学者」と紹介されるのか、というのは戦争責任について、キチッと自覚すべきであり、キチッと償うべきであるということ具体的な歴史事実に基づいてお話しするからだと思います。

最初にお話しした重慶で、日本の登戸研究所の偽札づくりのお話しをしました。

この事実が意外に中国では知られていないのです。三光作戦や南京虐殺はよく知られているが、「ソフト面の作戦」と私は言いますが、偽札が大量につくられて中国で使用されていたことを中国では知らないのです。

一方の日本人はもっと知らないのです。だから一人一人が自分の知識をキチッと積み重ねて、無知であってはいけないということをつくづく思います。そのことを中国の方にも、もっともって言っていかなければならないと思います。じつは来年(2010年)の5月に「中国科学院近代史研究所50周年シンポジウム」があります。そこで私がメインタイトルを「戦争責任をいかに継承するか」について、サブタイトルを「中国帰還者連絡会から撫順の奇蹟を受け継ぐ会へ」という報告をしていくことが決まっています。

そのために絵鳩さんたち中帰連の方々の話も積極的に聞いていきたいと思うし、撫順の奇蹟を受け継ぐ会の若者たちの話も積極的に聞いておきたいと思っています。